

花江都  
歌舞妓

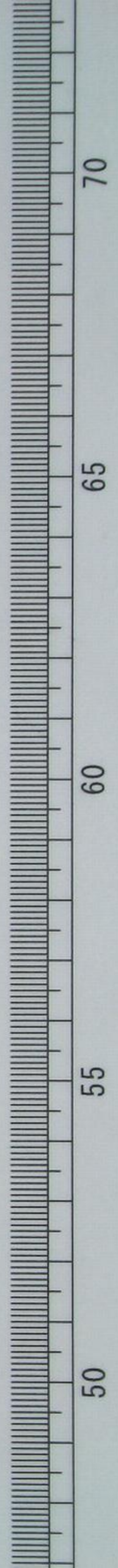
年代記

二編

三



津田文庫  
文庫 1  
1767  
7





早稲田大学  
図書館蔵書

花の都  
歌舞妓

年代記卷之四

東都

談淵樓 馬馬著

つた文庫

○ 延享五年戊辰春ヨリ 室曆七丁丑年

霜月マテ 十年ノ間ノ事ヲ記ス

延享五年 春中村座 飭鯨鏡曾我 駕昇清助 実の 常陸海老 忠助 実の

重忠長十郎。度りなるの出は。次ふ大日坊。三甫。備門。重衡の公。違。字。大丸を盗  
大日如來。とて。脊負。幼化の出。軍用令の。ため。姫の人丸を。使。又。奪。今。人。と  
さ。を。合。免。せぬ。丸。の。刀。で。殺。さん。と。忠。助。殺。され。身。の上。懺。悔。の。雨。は。  
次。ふ。清。助。出。た。助。が。持。り。あ。ぎ。丸。で。我。が。大。望。の。形。を。悟。り。友。人。結。合。あ。り。て。奉。を。  
各。々。合。別。と。又。頼。朝。老。子。の。堂。を。建。立。有。て。清。入。と。又。法。師。武。考。を。殺。し。其。の。貌。を  
中。入。込。下。を。主。忠。鳥。帽。子。を。袍。で。大。志。あ。ま。つ。さ。か。け。清。ま。と。幕。が。あ。げ。て。の。出。

延享五年

010190605553



之々の津小舟びくは名人格大詰景清老子の姿と成宗三祐経也て見世に之度  
 まての免をとも擲子取の甲を渡と足も持て立別る下大評判大高あともよ業と成  
 亀宗も玉拍鈴比素信九郎そがの十郎七三也て母満江頼公より冷我をうけ責  
 らるる又替と成松の太木小太石を語り下す郎を戒め大派の虎嵐富之助よ其  
 縄をたといふ女の力ふけひかく。新後の西へ業五郎五郎也て指を修ひ大石を引け  
 荒事あり次小太石丸の手にて琴と彈所大高也。菊之丞あが枝の西へ大ひ争り判  
 ありしが二月中旬より病氣也て休む工者お討面のかけ合せりぬ次よ記と。日市村座  
 紋名護全高我 鬼王彦三朝比素鬼次十郎と二の宮嵐小六右右也て郎在備山本  
 京四郎白木の之郎津打門三五郎討字市松は在備門よ幸四郎もごや山と市村豊  
 工者と因之郎助五郎也て工者お顔の似るとして十郎小打擲され切腹してゐ清をえて  
 此志かり面が似るとしてゐ下大ては同森田座へけいせ酒顔童子 頼光お岩井は四郎



笠懸銀葉  
 かけ合せりぬ  
 尾上菊之助  
 二代目 中村七三良  
 中村七三良

元祖 中村七三良







ま猿園中いも厥の初禊衣初ら居禊行履の打物に相槌の役目が大なる。大平  
 大社の観世音そこらがかんぢ智恵の弓△小弓小矢も誰のさそはるるも小太刀  
 を持一の太刀の一万石二の太刀の此箱王障子襖切破りしりく指を折日と毎更中月  
 今日優曇華の花結ぶる福壽卍○これイヤ我も貧乏も勝ら火罨の風さそ  
 くと徳めとあえら紅梅梅の猪木杖見次寄あめつふ物を石はる八幡又の氏神  
 稻花のいほと御守と標小瓶治富近き大願成就小瓶丸相槌小はちりてんく  
 かちの拍子打とら字のあてんく兄考人打まるとぞかちり源を團を叩く○さあ  
 徳をも打らんとは切らおし鼓太鼓のうねるや△おひびくさるるあいに△鼓  
 なる天意ごらある禊衣の指出ると相槌の相付む禊らち字邊が秘傳湯かんじ  
 かん禊衣のれは宿氣お獅子王の刃光りのみ里が野辺虎でもあても併ひ除け  
 此事堅固は年するの申望を△十更年する△五年するや△念考よ五前  
 が禊若いひびご後まると標を居るところははつれさるる物のいふ今うら

ていあうねぞく大車の日見えたるの紋めいそ夏も兄身もあはれ刃を打上  
 七〇まあちとて言て兄身た右かま並ひ△しうか夏禊衣との△上意の劔の刃を  
 肘前大空まきと現かたり△法神法菩薩列て稲荷明神の神通力かまを頼め  
 △稲荷は年月十年今打なる刃は没味○これくさうなんだんの上あわが△也  
 なる檀の上にあがり祐経に○三拜の膝をうけて扱は刃の決り同く夏も悦喜の  
 眉をひきた没取也教の槌をたたと打△てうと打△てうく△也さうく△打  
 たる禊の音と天比おまて夥しや△劔のうみそ世を乱天の村まの法没音  
 りんげし。そてもおまは祐経の○此劔の禊衣依て夏夏の病りあをらひ△公ま  
 兄身をたすおまへ△せ申にあ取也○今禊お掃お対面ハ七 智仁勇士は打  
 物に兄と 兼之入らやまうてまらひ。

其のあま入 つまをみか 渡辺の綱花井也之頼親中勤左衛門之田のはら坂田者十郎仲光辰十郎之



頼朝の御墓ちきとに兵の芳沢あやめ夫の悪いして寧舎ゆ急を右連て万尋一成就光  
 の敵へまり露ふるの奇近よりて愁をんをせぬも急夫を殺し自害せんとす射酒香菓子  
 を系後り。鬼女と成て頼光を害せんとする亦大崗り役者抄さくは控く大入るを評判  
 あり。此戊辰春二月六日借る萩野侍と断絶る。視聽院信乘日敬。同八月朔日。市村座  
**三代赤井問答** 坂田令射市村龜孫業新控益実の薩清度文松本幸四郎女房お連  
 瀬川兼治郎。かの雪姫岩小六元園姫侍の川市松竹原大和之助本名ふ原正文  
 大谷鬼次渡辺の源次細津打門之郎同奴かん助本名浮崎村文中村助五郎海子  
 多のせん山本岩と源流の頼らう沢村十郎と田の源太おろはる坂東又八木の  
 狂言二代源氏お信田の小吉郎を取組二とんぬ幸四郎清玄大評とん同五月五日より  
**中村座 義経十本権** とかのち浪平中村付九郎兵衛と浦右清門。あ西めれ小令吾松清  
 八百飛と吾家の内侍あじ玉拍源の義経歌川四郎と年川越太郎市川かん十郎。

かくの坂のやくわ坊嵐喜八いぐみの権太女房沢村お兼同一子若若郎中村仲義  
 ちつち前沢村山治治すけの房尾上第五郎川はら法眼市川宗三すや娘お里  
 嵐富之助これ盛徳助中村七之郎いぐみの権太佐友忠信源九郎狐之段沢村長十郎  
 ちや泳左衛門横川のかえん実八社宅のちの経二や市川海老若け海より大坂  
 竹本座由て延享四年正月十六日より初日めて大端のほし足亦依てかききせも本西  
 たり。市村座ハ七月十五日より **敵討巖流嶋** 元文二年大崗りれ狂言ゆ急十一年始を  
 ち月本武者之助坂東彦三郎佐々木かん柳松本幸四郎大崗り七月十八日年号改り  
 寛延元辰年 類見世より大谷鬼次二代目大谷廣治と改名をす。あやめ若次郎二入  
 中村座かくの嵐小六市村座かくの京若女形中村久米太郎下る中村座 **女守道楽物語**  
 ぼんちあひのん平本若長谷長谷長谷のちけら海老若を盛ふ七之郎。友人丹若六法大てれ  
 多田の若人長十郎孫子おむく中村之若を郎守治の通系妻となり。丹前繪おとと。



花菱程々此れ乱けのせん次女五通ののち他大あつり平相園清盛市川宗之上総の忠清  
中嶋、浦右衛門三郎より政舟川四郎五郎格の早太松崎八百兼かさつり法橋大目  
鳴見の郎は郎俊寛妹付宵の侍従瀬川兼次郎侍九郎主人髪京清中への貫  
妻と保のやゆ芳次あやも八龍の免のまろり引之味線大小入主人ままりり。

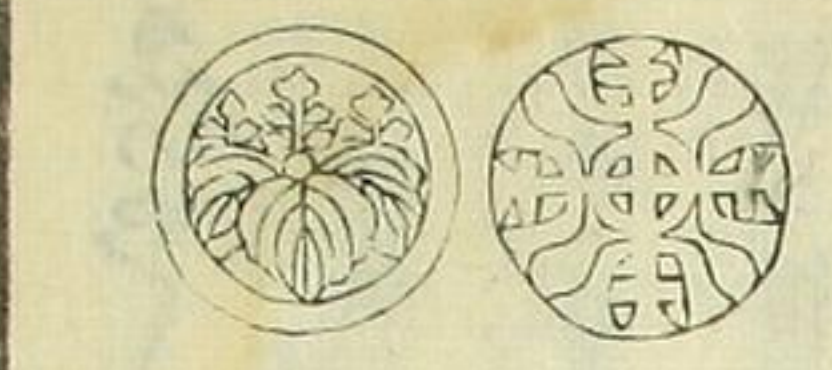
侍九郎イマ面白の奥山殿山の中宮様のお慰之と味線のまれをを弾さつりま  
兼清が二をえををを引をいり保のやゆも女ならもをせ給長主情位貫の女は  
みわのやゆとのや結びの天の由の高級あつと振つて免のまろをを全事ひえさつり  
位貫の女房もあやゆもあやゆの免のまろもひまろは太力とまろのまろか結て是  
さいをえをを相まゆもあやゆもあやゆの免のまろもひまろは太力とまろのまろか結て是  
目もあやゆは△忠清さんと保のやゆ△湯とすると寝まろのまろのまろか結て是  
まろとまろ甲△まろまろの免のまろもあやゆもあやゆの免のまろもひまろは太力とまろのまろか結て是

忠臣蔵

おまろ主人

朝引

かひ合  
せり吸



七兵衛景清  
信貫妻  
元祖  
中村侍九郎  
保のや  
芳次あやゆ



中村座

友人  
まろののり□之保のやゆまろりける袖のまろか結て是  
行くとまろ□まろのい思あてえの遺はとあやゆもあやゆの免のまろもひまろは太力とまろのまろか結て是



ありやくと△引ぢふ□はしりのききつゝえ兼あ八満座をびれててゑんまうこ  
 大匠痛△口もほえまおきかえんちると捨つて□と△早甲□大也小匠  
 の流△美綴の板碁るり□そはの腕がらぎなる△法綴の板をける□つら  
 腕が碁るり四ッ△一ッ△ちきれの△えんせ□なうやせ△えんせ□あ  
 △とろ△この△津附の板よりちまうてたをむる△このいりり□まうあ  
 怖しや女小稀る△カ小兜の碁るり□りて行のうら入者△サそれハ□こ  
 たのけ者めが足よりみこ上と重盛七之入長十郎のあ買をひる狂言大商り  
 同額入世市村座**放下僧**後 佐北の源左衛門坂東夫之郎寂明寺時於鶴を南北  
 関赤小六市村翁あてや望雁富之助と松の陣中村助五郎青砥九清門の大合度次  
 赤皇太師松本幸四郎二入め町人紅を庄兵衛まうよ小尾上兼之郎源を流る  
 津打門之郎とせの松清と智治で松世と夫婦なる人と庄兵衛と妻あをひまの世

二挺のうを流と故求塚の古くとして友人折のあを射おじとあ打めつて庄兵衛が  
 懐中せ安堵のは教書と奈合ととらゆとも大商で森田座**冬牡丹野内裡**小女また  
 を郎高家山中末四郎たうと市村岩井四郎あや判官岩井之郎師直あ坂田  
 者十郎伎後のと郎富辰十郎さうと市妹さよあ嵐小六旦那左衛門あじ音八  
 民負りの鮮鯛をたせて使者あすの猿を飼をさられ仰天て口上を忘れ小六を教く  
 口上の疑をたし准て思ひあてたてん**寛延三年**春中村座**男文字**物語海老翁扇  
 本名末の治郎にて鯉のひけんの體大商あやあ兼治郎女流法女を忠の合大て二  
 目長十郎鼻を大と本名赤沢十内あ櫓の巻をうら大商あり今年あ芳はあやあ  
 極上上吉あする同と月節句あり花川の助六ああ浦をあびまれ小徳川兼次郎  
 白濁り中村七之郎は九郎祐清は村長十郎此の意久市川家にかんる山平は村  
 赤十郎剣の大商て此年吉あめて始て橋を植るあ村兼基二百あをまて橋棧あ



中の町の長具立也。江戸前浄ら。助六郎家橋大評判大入大商の。同年夏中村座  
假各本忠厚藏 三年辰の月大坂竹本座新浄福理探大商りゆ。江戸歌弁妓之芝居もに  
真行と中村座 大星由良之助沢村長十郎隆治判官八百義助平七之助定九郎忠十郎  
おか保中村之系を町平を蒲門傳九郎師直と甫右備つ。九を夫と二役あり。加古川本義宗三  
女房とるせよあめめ。天川を平酒老義大で兒市村座由良之助義之郎幼平義五郎。  
多入や判官龜義平を備つ門と町力伝とおかる市松作九を夫助五郎。つきの助天川を  
後平度定九郎忠幸四郎とるを嵐富之助也。森田座由良之助山本京四郎幼平  
とるせ嵐小六。おかる嵐吉伝市川幼十郎本義富沢辰十郎隆治判官岩井半四郎。  
若狭之助花井茂之義平坂田者十郎九を夫大谷義左備。天川をてち保五郎じ音八と  
之座もに大入。大星由良之助の狂言。沢村納子享保九九年春中村座鏡橋故郷錦  
小始と勤てより。延享四年上京して中村義大判官あて大谷富内之役大あり。それあり

大坂竹本座まで羽五年忠長義七後目に大星由良之助と名を替これをして誠二納子の  
藝名のほまれと賞せり。上手れ義をて浄福理と組と栢越の神条の仙人  
吉野さう。夫の根五郎の潤色江戸紫小これを残と。行は日大高子兼。誹諧師水間  
治徳の門人之既と打立その夜格子の内へ一通を投返さ。治徳ひくられん。  
山をさくちかかち折しとる木の雪 大高子兼  
とへとぐにこの舟をたる。書にをせふとて山ゆめをいふ。山ゆめをいふ。山ゆめをいふ。と  
あり。其故也。治徳生界の内へ語らば死後と妻書ちし。とる及古を焼とてん中  
せし中めて栢越これをして出。滅や今世上。知らざる者もあり。顔小治徳の中。この  
紀念のふ人あり。世に多め。かゝる文体ある故也。先生の法。案直参り。海あり。是を  
貫らけ長く称美い。とて。持帰し。掛物とほて年月を送りぬ。あう。今年。新  
浄福理の其中にふ葉お似る名の中。我が役とせんと思ひ。一亦。今年より。天川。義平と



はとい評判よく跡十段同出の事申す大警文吾といふあり。大高源吾はこそと。その  
 親に皮といふ髪小一奉隈とて眼のちちより頼。いふ紅の隈を以て大槌をぬぎて  
 の出を射右のけ物宿に掛。とやまより今も至るまで忠信頼十一段目の此役市川代と  
 足を勤ふ。又門もあも勤る事とわたり。市村座秋狂云。曾我後難波也。市松助五郎非人の物  
 りいと成。味縁をひれ由良後といふ声とてはうおし。後市松と泥は合幸四郎を助  
 松兵衛信濃ののあて。又十四郎を殺と狂言大物。九月二日澁川系之忠信。本亦  
 押上大雲寺也。圓覺院即譽源阿是空居士と印を残と今様一流の名人と  
 世ごめて惜心同霜月歌川四郎五郎を河村宗十郎と改名を松清八百翁。清老翁の  
 父子と成て市川八百翁と改め。排名定花仙石佐十郎二代目。坂田半五郎と改名京四郎  
 若女形中村春代。之り。新見世市村座。頼朝軍配鑑。若我を助祐信坂東妻之郎。市田  
 の与市龜翁は若入在中。清助左衛門辰也。佐の川系翁。小條の娘也。いひのち嵐小六。

媛好也。陣鐘をくぐり。亦大で。川はの。之郎大谷。彦治。股野の五郎。中村助五郎  
 赤沢山の角力の場。あ人をくぐりて。滅のすまふの取組の。大。之。後。市川。津。矢  
 小島。之。妻。万。こ。う。の。第。五。郎。一。ま。ん。お。坂。東。兼。松。二。代。目。を。連。く。親。子。の。あ。う。た。ん。大  
 ひ。や。う。い。ん。今。名。姉。な。だ。の。葉。中。村。春。代。二。五。十。二。次。出。女。と。あ。ん。せ。の。亦。他。大。で。大。島  
 富。年。よ。り。魚。樂。十。町。の。評。判。江。戸。中。ま。り。中。村。座。御。能。太。平。記。足。利。高。氏。幸。四。郎。  
 長。清。か。げ。の。左。衛。門。宗。之。村。田。は。自。七。之。郎。義。祐。佐。市。川。市。松。ま。が。み。次。郎。と。い。ゆ。き  
 門。之。郎。勾。當。の内。侍。中。村。久。米。を。郎。細。六。郎。左。衛。門。河。村。長。十。郎。二。中。之。後。の。之。郎  
 あ。て。謙。釈。師。孫。口。と。取。下。記。筆。助。は。祐。へ。あ。対。する。故。七。八。之。繩。あ。て。あ。ま。を。く。て  
 白。妙。の。番。を。ま。せ。を。助。宗。之。が。八。丈。の。宮。と。い。へ。行。を。ま。り。て。宮。の。ま。り。ま。り。せ。と。い  
 火。の。か。げ。陰。ふ。ら。わ。ら。し。る。射。滅。亡。の。軍。陣。を。清。り。等。助。が。本。名。か。げ。の。左。衛。門。と。い。ふ  
 我。も。滅。へ。後。の。之。郎。と。名。の。亦。大。で。い。ひ。二。の。之。郎。女。房。六。浦。お。あ。や。り。白。く。と。い。ふ



幸次郎治の弟小沢村小次郎。森田師美宗曾孫。弓矢和田信房門下京四郎  
かみ平と清盛より浦宿つ実盛山と名孫系出風富之助身塚を即後十郎。系代  
龜宗の曾八宗十郎等仲して。系守郎と名ては。桶の福かけの正大でなり。尚  
五月未より海老巻引返起てせも休て此節やげん堀辺に偶居して。  
顔見勢の夜るれ太鼓も終るべし。あつらひに覺まね發 栢莖

寛延三年春市村座。そつに出入の湊を取組。多摩の忠告信の六谷度次獄門の庄を信  
お中村助五郎大南。中村座の **以清盛相斷** 大伴の志は沢村長十郎。菊次郎子孫  
の血をのませせし宗大南。之系守郎と改て。改て玉を系合派仕合大に  
幸四郎山はりの佐四郎白波流をに傳九郎大南。九月系之忠一周忌追若く付

瀬川土次石橋の正系をに。幼年初并巻きて大南。王子稻袋のり子  
而して天姓愛敬ゆて。おき日お坊二代目瀬川系之忠と成され。江戸中津巻ハ

路考茶又ハ路考櫛路考櫛曲帯おさくろろ結ひ小女の美るとして。路考  
娘といふも宜なる。世付長十郎。幸次郎退治の口上あり。同霜月中村明石七代目

中村助五郎と成る。顔見せ坂東又ハ坂東之八と改名 敵役 上上士ト译判記あり。て

顔見世中村座 **若木梅屋清盛** 清西八郎。幸四郎。浦の大助傳九郎。おさく。死権系は

門之師義彰。七之師八郎。為朝の妻むつら。芳沢あやめ。老鑿はせ。川の市松

佛の系。幸次郎清盛。長十郎。為朝。似せ勅使おさく。をせんき。馬の尾。小崩の鼻を  
喰。る。冷。飯。を。い。ひ。つ。け。お。さ。く。は。権。系。に。火。を。極。ま。せ。る。実。悪。手。は。よ。次。に。幸。四。郎。と。

門之雪障の大たて。大物もく。久系守郎。八友。長。老。膝。の。ち。を。射。られ。あり。ちんを。と。隠。し  
む。終。を。と。れ。喜。十。郎。と。な。て。有。て。長。田。の。庄。司。は。幼。方。傳。つ。を。殺。す。亦。大。南。なり。市。村。座。を  
**凱陣大業記** 篠塚ののち。定。総。市。川。海。老。巻。け。付。の。暫。れ。せ。り。ぬ。ふ。一。年。終。り。し。と。納。豆。を。作。  
柿のま。絶。よ。と。并。の。致。とい。ふ。と。有。る。系。巻。の。守。國。親。王。中。津。巻。の。浦。宿。門。今。冠。白。衣。



勘定いかに助五郎赤松立あて大般若権の内なる大塔のまをより突ころさん  
とるも入あぐくあて出湯儀入遠くあつあ坂東之八氏江中惣お坂田半五郎生あ大勢  
ゆりまありを例のゆり地アてて生師今そと入行せりゆも役者の内が子。おれも同く役者  
あて市川の油老を頼まてトテまくとひひまら。本舞臺へいき勘定いかに守と其益盤  
あて一打より殺したる勢ひの冷ど九夫の及びあま事にあつたの洋判その後  
守國志ん王おと佐あつんと有ゆ冠をたか死流大勢の敵役を退世し流してあて  
いづのまど引起し流員負の助五郎ゆ急一打を殺しては目見物方の以機噓いづと。  
殺するあつをあつるとの云沢見物の噓が。御おかみのあるはうち流は荒宴勢  
の名人大詰栗生を備へて楠の妻を弟の菊五郎大増まは嵐お柏を連て山城よ  
取まうれ難儀のあてまきりて持てせり出大勢と退散まは見物去年より同見  
あきりゆをえざるはる只勇みまて登りかや跡あてちあま王吳國より流り虎を

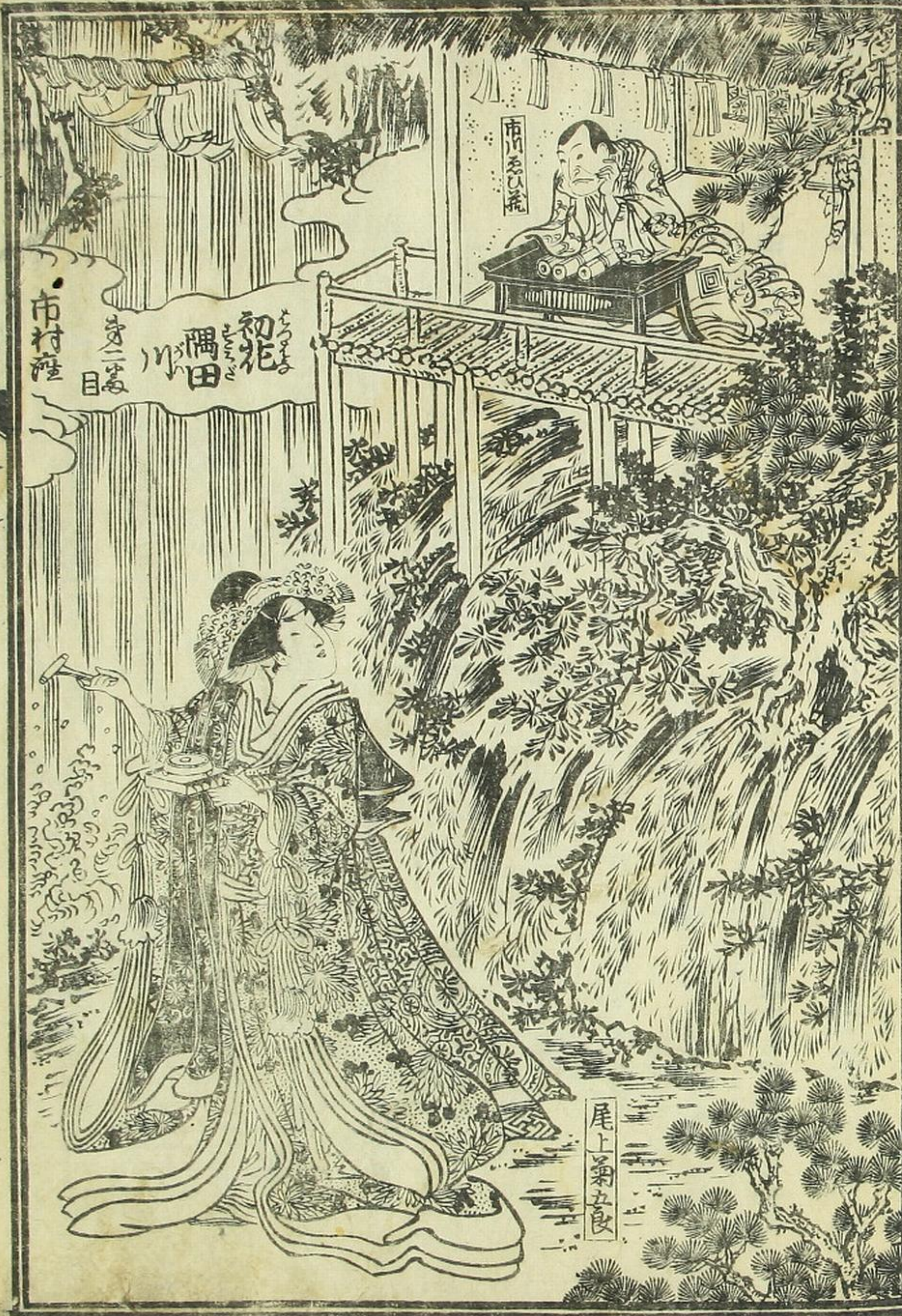
駈しと勘定は助五郎あて虎引の荒事あり此顔見世棚役は若もへ渡り昔へゆり  
狂言斗て二七目打牛。且射を備へる教麻上下に。今日ハ足切といふとる大勢  
大洋判なる。大谷度度大森考七勾當の内侍小佐川常世雪お瀬すると海流口が  
おをまき裸まなり。障る雪まきををええ愁歎のふ大勢り。小山田太郎新田貞貞  
二役兼務紙屋のお清森代之江相流七字を備へたり。ゆも大勢り大入森田座を  
初雪伶人袖。之谷の禪司市川宗と女房若手沢村小傳治けいせいの寄稿あて富之助  
俊徳丸のつま後翁。この恨も辰十郎小野風流お早成沢村宗十郎天王寺の樂  
人あて富士浅間の女し大てれ。今年唐土商船肥及長崎へお岸して市川海老蔵  
栢莖くへ諸葛孔明の末流とせ匠。諸葛白岩といふ者栢莖を頌する文を書して  
贈る。幅一尺八寸長サ六尺七寸  
余の白統地の巻物の序也。

# 濃曲儂音トアリ

文章字負  
八百二十字。



同姑蕪沉草亭の書文一尺寸半横四尺七寸唐紙文字頁四百五十字書一て有  
 今澄洲橋家藏と云。○此書五代目市川團十郎後小鯨系或附携すりて以て  
 祖父徳老翁の名人のけえりて唐土よりかゝる文章を誘る親五粒も又上手之世は  
 祢と我のト手にて其精拙といへども大江戸の仙貝負よるて役者の冠首と依  
 事こそ有とせけれ此未いなる者も我身も知れ足をもて先組の代也唐土  
 まぐも嘗一まぐ自慢せむ假令祖父の世中百万支の分限りとも今百文の銭  
 ならんごとくと世人の多きを流ん足んを許し秘伝むかきの方へせまられと流ぬ  
 その附録冊小  
 高名を我が  
 及ふ如く  
 先組の  
 歌ふ縁と汝もあふと  
 五代  
 市川之升  
 寛延四年 春市村座 初花隅田川 粟津六郎流先翁らならう賣例のせりぬ世に  
 四とび目なれと評判よく流るるのてく是を人毎にばとむ子もこれ苗を拾ひ



市村座 初花 隅田川 尾上菊五郎



あつ忍びの者も箱を拵る故ちがり引まゝ後入間の郡領市川海老藏留と云く  
忍びの姿も五つを渡り明て忍びの者れそ跡退りけ行を命へ吉田の  
お家は運と云ふ松井の流吾が事耳かると一刀お切お家のあみ外  
は多し。二どん目狂言市川海老藏神上人第五郎雲の終るに役死つれ世  
夫の別物の性より鳴神降してぬれる酒は酔外より神を討つを返連  
を切ら夫より大雷鳴神のぬれ終るを返りけ行を助五郎之等の平内にて殺  
引まゝ  
引まゝゆくとするへ粟津の六郎めて子殺り又平内殺す亦大あり一多同度流  
山田民を備門にて吉田の少将水口の旅宿めて撲死のいひぬおをら切もこの新入  
坂田友十郎遊女は事業五郎へ物語の正大で死大浩布衣となり梅若松を九右  
も重か子思入二どん目花梅を若源流を以せん菅赤森代と流を女房を  
梅若松を助りなる中不大を坂東と八牽引持耐平助五郎めて度流があらはははら

度流の助五郎がこゝろをけついにあらはし府先の麻より耐平と吉田の少将を討て  
ま退し麻生の松若と知れ流若本名山田の二郎後よ友人圍は合大南丸を五郎  
龜若少将の木像を梅へ二役木像めての耐平大で死吉田のは甚あやこ小佐川を世  
保も大あり此春評判記 大至極名人上上吉 市川海老藏 市村座  
寛延四年評判記その本のまゝ爰に写す 我亦兄を小松屋の梅香を  
まの好物也日比の半を安小釈る方等の雜經小海は大勝といふ大鳥生羽の  
長さ子五百里あ方合せてとふ里あり常お我よりすは非とみとと上げらる  
南極といふ星を竟よんがるを念よひて南をばして飛行る彼大勝羽を伸て  
一日お五十万里二年の月夜をいつと飛行もいづく南極をばはらふゆき  
神大勝も大きあらはれ二万里斗の大木のまじは笛アと普羽を休めらるかの大木の  
下より天地も打破る程の大声めて今我が驚ふとありて羽を休む小を何れと啼



大勝八肝をば... 我の小徳... 我の心も及らん... 津打門の小徳...

真極上手 上吉

沢村長十郎 中村座

中村座 伊豆神楽鑑 鬼王庄司左衛門長十郎...

八百五之助の役お七市松小性吉之次...

左衛門小右之助頼王嵐富之助...

若尾左司左衛門女房お梅嵐富之助...

隅田川舟四之目朝日より 女俠東雛形...

助五郎去人蓮池の太...

終る。といふ所 霍樹院常栄日房...

八兵衛見五郎伊郎就塚官大夫中嶋...

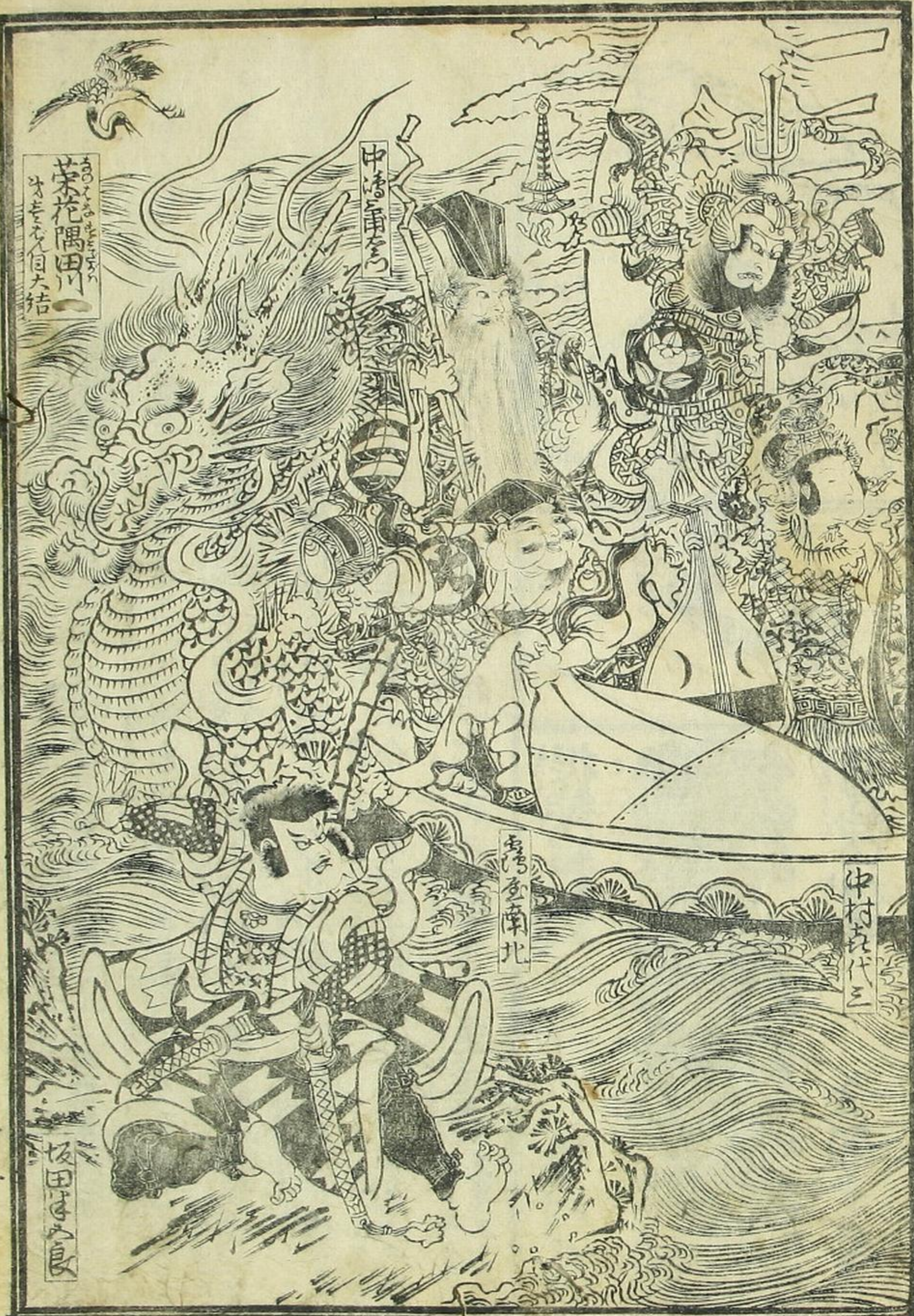
佐の川市松八兵衛母沢村長十郎...

左内市川八百五由笛木の左衛門...

の三吉瀬川吉次道中双六親子の名...

敵討まで出。七月より九月節...





榮花隅田  
舟老入回大結

舟老入回大結

舟老入回大結

舟老入回大結

舟老入回大結



舟老入回大結

舟老入回大結

舟老入回大結

舟老入回大結

舟老入回大結

舟老入回大結



追名狂言 ついでんきやうげん 福引名護屋 ふくいなきまごや 附狂言 ついでん かつら 菊次郎 きくじちやう 之間の鐘 とのかね の一幕 ひとまは 名古 なふる 山 やま のお  
 沢村長十郎 さわむらなちぢやう 女衞 めゑ の裏 うら 八兵衛 やへべゑ 幸名由比濱 きよなゆりひら 忠雪 ちゆゑ 松本 まつもと 幸四郎 きしちやう 何 なに も大高 おほたか 大入 おほいり あり  
 同七月十五日 どうしちがつ十五日 市村座 いちむらざ 佐木 さき 貞藤 さだふぢ 藤屋 ふぢや  
 源太 げんた 大谷 おほや 廣次 ひろぢ 友人 ともぢ 力 ちから 競 あそび る居 ゐ 引 ひ あり 淨 じゆ 濁 じやく 狸 ねずみ 大 おほ ざり 主 しゆ 膳 ぜん 太夫 たふ 二 ふた 強 かぢ 杵 きね 登 のぼ 弥 や 十郎 じちやう  
 此文 このぶん 句 く せり 奴 やつ 本 ほん 斗 と 文 ぶん 化 け して 其 その 付 つけ 前 まへ 小 こ 合 あ 一 ひと 魚 いさな 樂 がく 十 じゆ 町 まち の 住 すま り 孫 まご 古 ふる 老 らう の 人 ひと 今 いま  
 入 いり る ら ぐ ぐ とい い と と お お ぼ ぼ と と ら ら んと んと 未 ま ふ ふ ち ち る る 只 ただ 鳴 な 神 かみ 不 ふ 動 どう の の 像 さう 市 いち 川 がわ 海 うみ 老 らう 翁 おきな 若 わ 舟 ふね 次 ぢ 五 ご へ へ づく



振袖 ふりそで の 乳 ちのい 人 ひと 仲村座 なむらざ  
 留袖 とめそで の 招 まね 婦 め  
 全部 ぜんぶ 十三 じゆ 卷 まき



